〈研究ノート〉

明治創設期の神戸女学院（神戸ホーム）と同志社女学校（京都ホーム）

アメリカン・ボード女性宣教師によるリベラル・アーツ教育

枝　澤　康　代

Abstract

For this small study, I examined Kobe Home and Kyoto Home, two similar girls' schools that were opened in the early Meiji period (the 1870s) by American women missionaries of the same mission board: the American Board of Commissioners for Foreign Missions. My goal was to see how Japanese girls' education was conducted in that pioneering era, focusing on liberal arts education at Christian schools.

I concentrated on the work of the American women who served as principals of the two schools, the precursors of today's Kobe College and Doshisha Women's College of Liberal Arts. As teachers and administrators, did they find working with Japanese students and faculty difficult? What connections did they form with the local regions and communities? Through my research, I wish also to shed light on how liberal arts education was received by people in Kobe and Kyoto, most of whom had no prior experience of modern education.

0．はじめに

本研究は、明治初期（1870年代）に、アメリカ最初のプロテスタント海外宣教団体である「アメリカン・ボード」（American Board of Commissioners for Foreign Missions）[1]から派遣された女性宣教師によって、京都と神戸

に設立された二つのキリスト教主義女学校を取り上げ、実際にどのような教育が行われたかを調査し、明治期におけるキリスト教主義学校に於けるリベラル・アーツ教育の実態を捉えることを目的とする。

具体的には、神戸ホームと言われた神戸英和女学校（神戸女学院）と京都ホームと言われた同志社女学校とに奉職し、リベラル・アーツ教育を実施したアメリカン・ボード女性宣教師たちの働きを中心に、日本人教師との関係、女学校を設立した地域との関係などを分析し、キリスト教を教育の基本とするリベラル・アーツ女子教育が、神戸と京都の地でどのように受け入れられたかを考察する。

1．アメリカン・ボード
(American Board of Commissioners for Foreign Missions)

1）D. C. グリーン宣教師の来日

幕末の1858年に締結された、いわゆる「安政５ヶ国条約」により、日本の５港（函館、横浜、長崎、神戸、新潟）が開港されることとなり、外国人は居留地内ではあるが長期滞在が許されるようになった。この時を待ち構えていた海外キリスト教団体は、早速にそれぞれの宣教師を派遣してきた。代表的な例は、米国聖公会のウィリアムズ（Channing Moore Williams, 1829-1918）は長崎から大阪に、長老派教会のヘボン（James Curtis Hepburn, 1815-1911）は横浜に、オランダ改革派教会のブラウン（Samuel Robbins Brown, 1810-1880）も横浜に、オランダ改革派教会のフルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck 1830-1898）は長崎に、それぞれの到着月は違うが、全員が条約締結１年後の1859年に来日したのである。アメリカン・ボードは、この第一陣には遅れたが、1869年の年会で日本への宣教師派遣を決議し、1870年にD. C. グリーン（Daniel Crosby Greene, 1843-1913）を日本に派遣した、グリーンは、既に他教派が活動している横浜（あるいは関東）ではなく、神戸をボードの拠点とすることとし、神戸ステーショ

ンを開設した[2]。グリーンに続いて、ギュリック（Orramel Hinckley Gulick, 1830-1923）、デイビス（Jerome Dean Davis, 1838-1910）、ベリー（John Cutting Berry, 1847-1936）、ゴードン（Marquis Lafayette Gordon, 1843-1900）がアメリカン・ボード宣教師として神戸に派遣された[3]。

しかし、日本はまだ切支丹禁教令（1612年－1873年）が発令されており、公の伝道活動は出来ず、宣教師たちは居留地でのみで活動が許されていた。従って神戸以外では、大阪にある川口居留地での活動が精一杯であり、大阪にはゴードンが居住して、居留地の外国人のための日曜礼拝と週日のバイブル・クラスを担当した。

アメリカン・ボードが京都伝道を始めるきっかけは、東京遷都によってさびれてしまった京都の復興のために計画された「京都博覧会」（1872年から1928年まで、ほぼ毎年開催）である。グリーンたち宣教師は、第１回から第４回（1875年）まで毎回見物に行った[4]。博覧会期間以外は、外国人は特別許可がない限り京都へは立ち入り禁止であったので、京都での伝道を模索していた宣教師たちには、この京都博覧会は千載一遇のチャンスであった。ベリー、デイビス、ギューリックは、第１回の折に京都府役人の山本覚馬（1828-1892）と顔見知りになった。1875年の第４回博覧会では、ゴードンは３月から５月まで京都に家を借りて滞在し、山本覚馬にキリスト教入門書である『天道遡源』を進呈した。ちなみに、このとき山本八重（覚馬の妹、後の新島八重、1845-1932）は、聖書を習いにゴードン宅に通った。同じ時に新島襄（1843-1890）もゴードンの仮寓に滞在して博覧会を見学し、山本覚馬と出会った。この新島と山本の出会いが「同志社」設立の決定打となり、アメリカン・ボードは京都に伝道拠点を開設することが出来たのである。

２）宇治野村英語学校

グリーンは、神戸市内の中宮村八番地（山本通り５丁目）に住居を定めた。当時はまだキリスト教禁止の高札が町のあちこちに上がっており、日本人へ

のキリスト教伝道は許されず、外国人のための礼拝だけが許されていた。そこで、グリーンたちは、自宅で英語を教え、バイブル・クラスを開くことで、日本人への接触と伝道を続けた。またベリーは医師であったので、診療所を開設し、地域や監獄などのへの医療奉仕をおこなっていた。

そのようなグリーンたちの活動に参加する日本人の中で、熱心な青年たちが、グリーン宅で秘密裡に、漢訳と英訳の聖書研究を始め、その人数が次第に増えていった。日本人たちはグリーンと相談して、自分たちでお金を出し合って、英語学校を設立した[5]。それが宇治野村英語学校であり、1872年12月のことであった。この学校は、デイビスが校長であったが、幹事は関貫三（松山高吉、1847-1935）がつとめ、日本人が自主的に運営した。グリーンは旧約聖書を講義し、デイビスは英語、歴史、地理、算術を教えた。生徒数が次第に増え、1873年には学校運営をアメリカン・ボードに移管したが、宣教師たちは伝道と牧師養成の神学校というよりも、英語と一般教育に傾く学校の在り方に満足できずにいた。1873年２月に切支丹禁制の高札が撤去され、日本人に直接伝道できるようになったことを期に、デイビスたちはこの学校を廃校にした。しかし、同年にアメリカン・ボードの最初の独身女性宣教師として神戸に着任したタルカット（Eliza Talcott, 1836-1911）とダッドレー（Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906）[6]は、すぐに三田・兵庫地区の女性への伝道を始め、男子校に入れ替わって、神戸市内の花隈町で、子どもと婦人のための英語学校を開設した。それは順調に発展して神戸英和女学校（神戸女学院）となり、神戸ホームと呼ばれた。

すなわち、上述した宇治野村英語学校は、1875年に神戸に設立された神戸女学院（1875年10月12日創立）と、新島襄を筆頭にデイビスと山本覚馬が結社して京都に設立した同志社（1875年11月29日創立）の共通の母体であったと言える。それはまた、「同志社分校女紅場」として京都府に開業願いを提出して生まれた同志社女学校（1877年４月21日認可、宣教師たちからは京都ホームと呼ばれる）も、宇治野村英語学校を共通の母体とする学校であると

言える。

このように神戸と京都に、ほとんど同時期に、同じ宣教団体のもとに設立され、ともにリベラル・アーツ教育を標榜したキリスト教主義女学校は、双子のように瓜二つの学校となったのであろうか、それとも、それぞれに個性的な、非常に違う学校となったのであろうか。以下に、まずリベラル・アーツ教育とは何かを概観し、次にリベラル・アーツ理念を取り入れて女子中・高等教育を実施した神戸ホームと京都ホームについて考察をする。

2．リベラル・アーツ教育

リベラル・アーツ教育を定義するのは非常に難しい。ブリタニカオンライン大百科事典によると、「リベラル・アーツ」は、別名「自由七科」として説明されている。それは西欧において教養人が習得すべき基礎学問としての７科目を指し、文法、修辞学、弁証論（論理学）から成る初級の３科 trivium と、算術、天文学、幾何学、音楽学の上級４科 quadrivium で構成される。司祭、医師、法律家になるには、これらの７科を習得した後に、更に上級の神学、医学、法学の道に進まねばならなかった。自由七科の名の起りは共和政ローマ末期の哲学者である M. キケロ（Marcus Tullius Cicero, BC106年－BC43年）によるが、彼はこれらの科目が自由民にふさわしい学問であるとの意味からそう呼んだのである。

リベラル・アーツは、中世に大学が創立されて以来、ヨーロッパの高等教育の理念となり、その時代、地域によって種々に変遷しながら実施されてきた。イギリスの哲学者、J. S. ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）は、1876年のセント・アンドルーズ大学名誉学長就任演説[7]で、大学は専門家や技術者を養成する場ではなく、単に詳細な知識を頭に詰め込んで暗記するのでもなく、ものごとの原理を追求し把握するために必要な知識を習得し、その知識を正しく良心的に運用する人物に教育することが大学の目的であるとしている。大学で学ぶ「一般教育」とは、そのためのものであるから、人文

科学に限らず、社会科学、自然科学の広い分野から学ぶべきであるとする。文学教育において、役に立たないように見える古代ギリシャ語やラテン語の学習が、現代語の学習と同様に重要であることを丁寧に説明し、科学教育は、合理的判断能力を身につけさせ、道徳・社会科学の分野の学習は、意思の訓練になると言っている。更に、大学教育における知識の獲得は、その目的の半分を消化しただけであり、残りは道徳教育と宗教教育に根ざした人間精神の涵養が重要であるとしている。そして、道徳的、宗教的影響を学生に与えるには、大学全体にみなぎる気風が大切であるとしている。ここに教育と宗教の連携の重要性が示されている。

このミルの理念は、16世紀にアメリカ大陸に移住したピューリタンたちが設立した大学（ハーバードなど）の理念でもあった。つまり、16世から18世紀のアメリカの大学教育は、オックスフォードとケンブリッジに倣う、古典的なリベラル・アーツ教育であったと言える。しかし、18世紀からの科学の進歩は、啓蒙思想の流行を招き、人間の理性による判断を最優先とするようになった。学問の専門化が進み、大学は大学院を創設し、専門科目に即した新しい学部・学科を増設し、総合大学（university）或いは研究型大学（research university）と言われるようになった。その結果、学問の世界においても、世俗化が進み、教会の権威の弱体化と相まって、大学での宗教離れを引き起こした。21世紀の現在も、多くの大学では世俗化がさらに進行し、教養教育における宗教の影響は非常に希薄になっている。その代表例がハーバード大学だと言える。

一方、アメリカでは19世紀初頭にキリスト教信仰の第二次大覚醒運動（リバイバル）が興り、それを経験した人たちは、大学教育の宗教離れに反旗を翻し、少人数教育による単科大学のリベラルアーツ・カレッジを立ち上げ、宗教や倫理・道徳教育を重視する「人格的」教養教育を実践した。その代表例がアーモスト大学（Amherst College, 1821年創立）である。19世紀に日本に来日した宣教師たちの多くは、このリベラルアーツ・カレッジの卒業生

であった。

ちなみに、D. C. グリーンは、1861年にダートマス大学（Dartmouth College, 1769年創立）に入学し、1865年に卒業している。ダートマス大学は、東部アイビーリーグ大学の一つであり、大学ランキングは10位以内に入る名門大学である。現在は大学院を持ち、形態的には総合大学であるが、少人数制（学部生は約4500人）を今も維持し、リベラルアーツ・カレッジであるというアイデンティティを堅持している。それは、大学名を Dartmouth College とし続けていることからも分かる[8]。

茂（1986）によって、グリーンのダートマス大学の学習履歴が調査されているが、当時のリベラル・アーツ教育の具体例が示されていて興味深い。

> １年：ギリシャ語、ラテン語、数学
> ２年：ギリシャ語、ラテン語、数学、応用工学、フランス語、修辞学
> ３年：ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語、物理、論理学、天体学及び気象学
> ４年：哲学、道徳哲学、修辞学、化学及び地質学
>
> 彼の学んだ学科は語学を中心とした一般教育と、日常生活に生きる科学教育の分野で、この他に授業と礼拝の出席が厳格に課せられ、評価されている。（p.7）

この履修票を見ると、グリーンは典型的な古典的リベラル・アーツ教育を受けたことがわかる。

なお、女子教育に対するリベラル・アーツ教育については、19世紀のアメリカでは、マウントホリヨーク・セミナリー（Mount Holyoke Seminary, 1837年創立）（現マウントホリヨーク・カレッジ）が当時最高のリベラル・アーツ教育を提供したといわれ、多くの女子大学の手本となった。これについては、次の項目で説明する。

３．神戸ホーム（神戸英和女学校、後の神戸女学院）

１）タルカット校長時代（1875－1878年）

イライザ・タルカットとジュリア・ダッドレーは、「女性への伝道は、女性でなくてはならない」との認識から、日本に派遣された最初の独身女性宣教師たちの一員であり、1873年３月に着任した。この年の２月に「切支丹禁制」の高札も撤去されていたので、二人は神戸市内の花隈村にある旧三田藩士の家を借りて私塾を開き、英語、唱歌、聖書などを教えながら日本人女性たちへの伝道を積極的に推し進めた。

タルカットとダッドレーは、来日当初から直接伝道に強い関心を持つ伝道者タイプの宣教師であった。そのため、二人はそれぞれに、三田や兵庫各地に出向いて活発に伝道をしていたが、日本人女性伝道者養成の必要性を強く感じるようになり、私塾の参加者も増加したので、学校組織にして優秀な伝道者を育成することを熱望していた。

その結果、アメリカン・ボードの支援はもとより、旧三田藩主九鬼隆義[9]と旧藩士たちの物心両面の協力のもとに、神戸諏訪山に新しい校舎（教室・宿舎兼用）を建築し、1875年10月12日に、正式に「女學校」（The Girls' School）が開設された[10]。神戸女学院では、創立記念日は、私塾の開始日ではなく、アメリカン・ボードの正式な学校として始まったこの日を学院の創立日としている。以下、寺澤（1990）に基づき、神戸ホームの様子を概観する。

神戸ホームの初代校長はタルカットが勤めた。ダッドレーは舎監であった。タルカット時代の教科内容を示す資料がほとんど残っていないようであるが、寺澤（1990）は、明治９年８月の『七一雑誌』[11]に掲載された広告を紹介し、午前は国史漢籍を勉強し、午後は英語と西洋の諸分野の学科目を能力別クラスで学び、聖書の授業は毎日行われたことを示唆している。さらに、算数、地理、歴史、国語、日本語作文など文部省指導要領に従った科目以外に、英

語、歌唱、万国史、旧約聖書物語も、翌年から教えられたことを紹介している[12]。これは、次の校長時代に導入されるリベラル・アーツ教育の萌芽と言えるかもしれない。

２）第２代クラークソン校長時代（1879年－1882年）

バージニア・クラークソン（Virginia Alzade Clarkson, 1850-1940）[13]は、1877年に神戸に着任した。マウントホリヨーク・セミナリー出身であり、活動的で教育者タイプのクラークソンは、日本人への伝道よりも、リベラル・アーツの理念を持ちこんで、学園の教育水準の向上に努めようとした。クラークソンのこの教育方針は、先輩宣教師たちの教育方針と摩擦を生むようになり、タルカットとダッドレーは直接伝道に専念することになった。そして神戸ホームの校務はクラークソンが校長として引き継ぐこととなった。

クラークソンは、マウントホリヨーク方式を取り入れ、1880年に、学科課程を編成し、女子高等教育機関となる基礎作りを行い、校名を「女學校」（The Girls' School）から、「神戸英和女学校」と改めた。

マウントホリヨーク方式とは、19世紀後半に、メリー・ライオン（Mary Lyon, 1797-1849）がマサチューセッツ州サウス・ハドレイに創立した「マウントホリヨーク・セミナリー」の教育方針のことであり、当時の女子教育の最高峰を行くものであった[14]。メリー・ライオンは、女子教育の向上を目指して、①男子大学生に匹敵する知識を女子学生にも与える（実際、ライオンは、男子校として有名なアーモスト・カレッジのカリキュラムを参考にし、教科書は同じものを使用した）、②よき母親、よき主婦となる女性の育成、③よき教師、よき宣教師の養成を目的とし、ａ）知識の獲得、ｂ）宗教教育、ｃ）家事・生活上の規律訓練を重点的に実施し、オールラウンドに有用な女性キリスト教徒としての「人格」を陶冶する教育を行った。具体的には、以下の科目が提供された。

ａ）知識獲得のため：

科目として、生理学、古代地理、歴史、科学、動物学、植物学、鉱物学、天文学、ユークリッド幾何学、算数、文法、教会史、ラテン語の他に、作文、体操、音楽は必修科目とし、フランス語、ピアノ、絵画は選択科目として提供した。

b）宗教教育のため：

寄宿制度により、毎日、祈りと説教を聴く・礼拝に参加する生活であった。日曜日の教会出席は義務であり、時間になると隊列を組んで教会に向かった。また、世界の人々の回心のための断食日もあり、伝道への教育も積極的に行われた。

c）家事・生活上の規律訓練として：

・寮の家事（炊事、洗濯、掃除）を生徒全員で分担して行い、教員はその監督をすることになっていた。

・時間厳守：時間はベルで伝えられ、ベルに遅れると全体集会で申告と反省をしなければならいことがルールとなっていた。これは家庭にあって、時計の時間にしたがって行動する習慣のない女性を訓練し、実社会で男性とも仕事が出来るようにするためであった。

クラークソンは、生徒を学力によって３クラスに分け、国語と漢文の他に、英語で代数・英文法・植物学・英作文・地理・歴史を教えた。裁縫、図画、音楽の授業に加えて、軽い体操や１日２回、生徒の弾くオルガンに合わせて行進が行われた。また社会各方面の知識を得させるために、毎週土曜日に新聞通読会も開かれた。（寺澤、p.139）

当時（1880年９月）の寄宿生たちの日課は、第５代院長を勤めたシャーロット・デホレスト（Charlotte B. DeForest, 1879-1973）[15]によると、次のように記録されている。

A. M.	8－8：30	prayers
	8：30－9	silent study hour
	9－11	recitations
	11－12	rest time for most or domestic work getting up dinner etc.
P. M.	1：30－4	recitations
	4－5	exercise hour or supper circle
	5：30	supper followed by prayers, then rest
	7－8	silent study hour

(After that) “since last January the girls have had a little prayer meeting of fifteen minutes, being divided into five classes: older girls not Christians, older girls who are, younger girls who are Christians, those who are not, then the youngest.… At half past nine the last bell rings and all must be in bed. They rise at five in summer, half past five in winter, doing their domestic works etc. until eight.” (p.14)

1882年に、クラークソンの計画による最初の卒業生12名が送り出されたが、卒業論文は、忍耐論、文明論、時勢論、道徳論などの他、英語論文もあり、卒業式で朗読され、大きな感銘を来場者に与えた。

クラークソンの改革は、その後も引き継がれ、神戸ホームをアメリカのリベラルアーツ・カレッジのレベルの学校に引き上げる努力が積み重ねられた。1891年にはカリキュラム改正を行い[16]、1894年に校名を神戸英和女学校（Kobe Girls’ School）から、神戸女学院（Kobe College）に改称した。クラークソンに続く高学歴の校長たちは、校長を支える同僚の女性宣教師、及び優秀な日本人教師の支援により、リベラル・アーツ教育をさらに充実・発展させた[17]。

４．京都ホーム（同志社女学校）

１）京都ホームの誕生とスタークウェザー校長時代（1876年－1882年）

新島襄は1875年に同志社英学校（男子校）を創設した。新島襄の妻八重と女性宣教師スタークウェザー（Alice Jennette Starkweather, 1849-1921）[18]は、女子を対象とした塾を1876年10月24日から開始していた。そこで、新島襄は、女学校としての正式な開業願いを、「同志社分校女紅場」（後日京都府から、学科内容を検討した結果、「女紅場」ではなく、「女学校」とするようにと指導があった）として京都府に提出し、1877年４月21日から、御苑内旧柳原邸の一室で授業を開始した。

同志社女学校の設立は、宣教師デイビスが、京都にキリスト教主義の男子校を作るのなら、「それとペアの関係にある女学校が是非共に必要である」と提言し[19]、同志社の結社人でもある山本覚馬も賛同し、新島襄に働きかけた結果である。山本覚馬が従来から女子教育の必要性を認めていたことはあまり知られていないが、彼の日本の将来に対する提案書である『管見』には、「女學」という項目を立てて、以下のように述べている。

> 国家を治めるにはすぐれた人物が必要なのだから、人材の育成は緊急の要件である。日本や中国ではこれまで女性に学問を教えてこなかった。これからは男子と同様に、女子にも学問をさせねばならない。
>
> 両親が共に気力が充実し思慮深い親であると、その子は親に優り、またその子も親に優る人物となって、やがては才智能力共にすぐれた者が生まれてくるのは、当然のことだろう。子どもは女性と接することが多いので、賢明な女性が子どもを教えるのと、愚鈍な女性が育てるのとでは、雲泥の差がある。
>
> 女性は生まれながらにして沈着で配慮が行き届くので、その性質にかなう学問芸術や指示に関わる分野を選んで、教えるべきである。そのうえ、才能のすぐれた女性にはさらに学問をさせるべきである。（『山本覚

馬建白「管見」―釈文・訓み下し文・現代語訳・英語訳―』p.94）

山本覚馬のこの考え方は、ある面では、女性は良妻賢母であるべきだという固定的な役割分業の考え方であるともいえるが、一方では、女性は「生まれながらにして沈着で配慮が行き届く」と述べ、女性はその特質を生かした教育を受け自立することを促していると言える。この建白書が役所に提出されたのは、最終的には1868年６月である。江戸幕府が崩壊したとはいえ、まだまだ封建思想の強い時代に書かれたことは、山本覚馬の先見性を示している。

新島襄も、佐々木豊寿[20]への手紙に以下のように女子教育の必要性を述べている。

「余は貴姉に頼みたき事あり、、、女権を拡張することに今一層の力を尽くされんこと之なり、、、先づ今日の女学生に人権の重んずべきを覚らしめ、慷慨の心を起こさしめざるべからざるなり、、、凡そ従来の女子学生を見るに、、、男子即ち夫の圧制を受け、折角学び得たる所の技量も之を顕ハすの機を得ず、却て学ばざる事のみを為して朽ち果てるハ如何にも残念なり」（『同志社百年史』p.195）

このようにして開設された同志社女学校は、最初からリベラル・アーツ教育であった。スタークウェザー（同志社女学校での肩書は教頭であったが、実質的には校長）は、ハートフォード女子セミナリーの卒業生であり、卒業後しばらく教師をした経験を持つ。ハートフォード女子セミナリーは、アメリカでも最古の女子セミナリーの一つであり、女子教育の先駆者として有名なキャサリン・ビーチャー（Catharine Beecher, 1800-1878）が創設した学校であることを考えると、マウントホリヨークとよく似た教育を受けたのではないかと考えられる。

したがって、スタークウェザーは、マウントホリヨーク方式の教育を展開しようとしたが、開以来、二人のヘッド問題、つまり校長は新島襄か、スター

クウェザーか、学校業務の決定権は誰にあるのかに悩んだ。アメリカ人の当然の考え方として、実際に学校を運営している自分が校長であり、決定権者だとスタークウェザーは考えるのに対して、書類的には新島襄が校長であり、周囲の日本人は、女性が男性よりの上位の校長という位置に立つことを快しとしなかった。さらに、寮母をしていた新島襄の義母、山本佐久（1809-1896）との生徒の躾などに関する意見の違い、また佐久の娘であり新島夫人である新島八重の横やりに苦しんだ。これは異文化間コミュニケーションの衝突と考えられるが、すぐに解消できる問題ではなく、スタークウェザーは相談する同僚もなく、独りで苦しんだ。千年の都に位置し、種々の伝統が渦巻く京都市に建設された京都ホームでは、この異文化問題は、開港地にある神戸ホームとは比較にならない程大きかったのではないかと想像できる[21]。

しかし、京都ホームは、1879年に同志社英学校を卒業した宮川経輝（1897-1936）と加藤勇次郎（1857-1934）が女学校のスタッフとして加わることになり、更に４年間待ち続けた女性宣教師のパーミリー（Harriet Frances Parmelee, 1852-1933）を迎え、同志社女学校第一期隆盛期を1879年から1880年度に迎えることが出来た。1880年度のカリキュラムが残っている。

1880年度の京都ホームの時間割（別紙）は、神戸ホームのもの（別紙）と大きな違いはない。朝の起床時間は、京都ホームは年間を通して５時半（神戸ホームは、夏は５時、冬は５時半）[22]であったが、カリキュラムそのものは、スタークウェザーの作成したものと、神戸ホームでクラークソンが改革したものと大差は認められない。

２）第２代 A. Y. デイヴィス校長時代（1882年－1885年）及び、第３代クラークソン校長時代（1885年－1887年）

第２代校長のアンナ・Y. デイビス[23]は、マウントホリヨーク・セミナリーの卒業生であり、京都ホームのリベラル・アーツ教育を徹底させて、以後の校長に引き継いだと言える。

学科課程

第一期　第二期　第三期

第壱年
小学読本　一、二
地理初歩
習字　諸礼

第壱年
小学読本　三、四
日本地誌略　一
習字　諸礼

第壱年
日本地誌略　二、三
日本略史　上
習字　諸礼

第弐年
日本略史　下
万国地誌略　全部
習字作文講義裁縫

第弐年
万国史略　全部
算術教授書　上下
同　上

第弐年
初学人身窮理　全部
算術教授書　二
同　上

本邦科

第一期　第二期　第三期

第一年
万国地誌要略
算術教授書三ノ上下
習字毎日裁縫毎月二回
作文講義毎周二回

第一年
万国地誌要略ノ前期続
算術教授書四ノ上下五
同　上

第一年
万国通史
代数学
同　上

第二年
万国通史　前期ノ続
代数学
習字毎日裁縫毎月二回
作文講義毎周一回

第二年
皇朝史略
物理全志
同　上

第二年
皇朝史略　前期ノ続
同　上
同　上

第三年
グレイ本草学
ダルトン人身究理

第三年
フオセット経済書
化学

第三年
脩身学天文学
家政要旨

英書科

第壱期　第二期　第三期

第壱年
モツゴフイ第壱読本
綴字読方訳

第壱年
モツゴフイ第二読本
同　上

第壱年
モツゴフイ第三読本
同　上

第二年
スウイトン第壱文典

第二年
同　第二文典

第二年
モツゴフイ第四読本

第三年
同　第五読本
英作文

第三年
英作文
スウイトン　万国史

第三年
英作文
同　万国史続

第四年
グリン　英民史小
クエツケボスン　文章学

第四年
同　同　上
オンドルウード　英文学

第四年
同　上
キソー　文明史

1880年度同志社女学校学科課程表

（この年から予備科・本邦科・英書科と学科課程も整備された）（英書科の科目担当者の入った時間割表は、別紙（p.129）を参照のこと。）　（『同志社女子大学125年』p.53）

A. Y. デイビスが京都ホームに取り入れたマウントホリヨーク方式は、大枠はスタークウェザーの頃に出来上がっていたが、1）寮生すべてが交代で家事全般（食事作り、食器洗い、部屋の片づけなど）をすることと、2）時間の観念を植え付けることであった[24]。つまり、時間の区切りをベルで知らせ、皆はベルに従って行動することを求められたのである。ベルの当番にあたった者は、1分でも遅れると、それを100人に換算すると100分の無駄となると知らされ、大きな緊張を強いられたようである。

A. Y. デイビス校長在任中に、同志社女学校にとっては最大の事件である、いわゆる「明治18年問題」が勃発した。これは、スタークウェザーの時代から問題となっていたことであるが、女子部の全宣教師は引き上げることを決議し、実際に休校になった事件である。その原因は、①男子校と女子校が地理的に近いために起こることであるが、たとえば、男子生徒が、女子校の規

則は厳格すぎるから、変更するように学校に申し入れをすべきだ、などと内政干渉にもなるような意見を女子校生に吹き込み、女子学生が動揺することがよくあること、②女性が学校長になることが日本人には容認できないことと、日本での伝統的価値観を持つ新島夫人とその母親と宣教師との意見対立がしばしばあること、にあった。

この事件は、バージニア・クラークソンが第３代校長になることで、一応解決した。クラークソンは、神戸ホーム時代の経験を活かし、巧妙に相手側の意見を封じ込め、学校運営を軌道に乗せた。それには、同志社女子部の幹事に就任した大沢善助[25]の強力な支えがあってこそのことであった。

クラークソンは、性格的に偏ったところがあり、人間関係の構築は誰とでも上手くいくとは言えなかったが[26]、非常に有能な人物であり、リベラル・アーツ教育には打って付けの教師であったかもしれない。坂本（2012）は、「彼女は、同志社女学校ではA. Y. デイビスに次いで２人目のマウントホリヨーク出身の宣教師であったので、当然のこととして、寮生活における家事の切り盛り、生徒の躾、病人の世話をしながら、毎日４～５時間の授業をこなし、さらに日曜学校教師をしている生徒たちの指導にも万全の力を注ぎながら」[27]懸案の学内問題を調整し、解決していったと紹介している。

５．リベラル・アーツ教育の受容と葛藤

以上、神戸と京都の２つの女学校に導入されたリベラル・アーツ教育を概感した。両校とも、教科内容や時間割はよく似ていると言えることが分かった。そして、マウントホリヨーク・セミナリー、あるいはそれに準じる高いレベルの女子教育を実施している学校の卒業生、もしくは、さらに高いレベルのリベラルアーツ・カレッジの卒業生が校長となって、リベラル・アーツ教育を実施したことが分かった。

神戸ホームも京都ホームも、生徒たちは、寄宿生活の中で、宣教師と共に寝起きし、神と人に誠実に仕える宣教師の生活態度に感化されながら、レベ

ルの高い学識を身に着け、偏らない思考力と判断力を養い、種々の体験を通して豊かな女性へと育っていったと思われる。1870年代から1890年代後半まで、日本における近代教育が導入されたその黎明期に、従来の日本的教育とは全く異質なリベラル・アーツ教育の基本理念が、神戸と京都の二つの女学校で実践されたと言えるのではないだろうか。

ただし、その理想的なリベラル・アーツ教育を達成するには、環境整備が必要であることが分かる。すなわち、まず十分な人的支援である。リベラル・アーツ教育は、その教育を受けた経験がある者でないと実施するのは難しいのではないかと思われる。また、経験者であっても、一人では難しい。実施者を支える優秀な人材が必要である。例えば、京都ホームの宮川経輝、加藤勇次郎、大沢善助のような、また神戸ホームの吉田作彌（1859-1929）や原田助（1863-1940）のような助け手の存在である。

次に重要なのは、共に生活するということであろう。一人の人の全体を見て感じるところに、また肌を通して学ぶところに、本物がある。これが出来るのは寮生活であり、共同生活の最大の特典である。その次に重要なのは、少人数であろう。大人数の共同生活は考えられない。少人数のグループで、気兼ねをせず意見が言え、学びあうことが大切である。何事にも偏見を持たずに、積極的に取り組み、その結果獲得した知恵や経験を、その場限りとせず、内在化することも非常に重要であろう。

このように見ると、リベラル・アーツ教育は、「言うは易く、行うは難し」の事業である。神戸を見た場合、神戸は開国のために新しく造設された町である。新しい文化への抵抗も少なく、むしろ積極的に西欧文化・文明を取り入れようとする気風があり、旧領主などからの積極的支援もあり、キリスト教主義教育の導入には大きな抵抗はなかったと言える。溝口（1891）は、（神戸には）「活発な能動態的性格を見出し得る」[28]としている。

一方、京都は、千年の都の伝統を抱えて、仏教や神道の大きな寺社の乱立する都市であり、キリスト教に対して強い反発・攻撃があった。しかし、京

都人の慎重だが、進取の気性に富む性格は、古くからの伝統を転覆させる恐れのあるキリスト教をある程度受容し、自分たちの生活に役立つ部分を取り入れたと言える。つまり、京都に設立されたキリスト教主義学校は、伝統の街に受け入れられるために、教育方法などを種々に変更しなければならなかったが、最終的にはよい種がまかれ、立派に育ったといえるのではないだろうか。

したがって、本稿のテーマである「(二つの）キリスト教主義女学校は、双子のように瓜二つの学校となったのであろうか」の答えは「否」であるが、ともにリベラル・アーツ教育を実施し、定着させた点では「然り」である。

リベラル・アーツ教育の受容は簡単ではない。特に日本のようなキリスト教とは異質の文化を持つ国で、リベラル・アーツ教育を続けることは難しいと思われる。啓蒙思想が広がり、教育に宗教は必要ないとするのが趨勢の現代社会において、明治期のような純粋なリベラル・アーツ教育は実践できるのであろうか。今後のさらなる問いかけと研究が必要であると考える。

注

1　アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions、米国外国伝道委員会、1810年創立）は、アメリカの最古、最大の海外宣教師派遣団体であり、インド、中国、ギリシャ、アフリカ、中近東に多くの宣教師を派遣した。アメリカン・ボードは、プロテスタント会衆派が主流であるが、他教派も含む超教派宣教団体である。新島襄は、日本帰国直前の1874年にアメリカン・ボード準宣教師に任命され、1875年に宣教師であると同時に創立者・教師として同志社を設立した。

2　茂　義樹『明治初期神戸伝道とD. C. グリーン』新教出版社、1986年、38-40頁。

3　茂　義樹、同上、93-104頁。

4　本井康博「京都博覧会とアメリカン・ボード―京都ステーション（同志社）への道―」『キリスト教社会問題研究』45号、1966年、100-139頁。

5　茂　義樹、同上、104-113頁。

6　タルカット：ニューイングランドのロックヴィル出身。サラ・ポーター女学校出身。1857年に州立師範学校卒業後、教員経験６年。ダッドレー：ロックフォード

出身。ロックフォード・セミナリーにて学ぶ。

7　J. S. ミル著、竹内一誠訳『大学教育について』、岩波文庫、白。

8　参照：ダートマス大学ホームページ
〈https://admissions.dartmouth.edu/about/history-traditions〉

9　九鬼隆義（1837-1891）：安政６年摂津三田藩藩主九鬼家13代。白洲退蔵を登用して藩政改革を断行。摂津三田教会、神戸女学院の創設を支援した。貴族院議員。子爵。〈https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=5011062334800〉

10　寺澤美代子「神戸女学院の創設と初期の英語教育」『日本英語教育史研究会』５（０）、1990年、136頁。

11　『七一雑報（なないちざっぽう）』：1875年12月27日創刊。1883年６月26日終刊。日本最初のキリスト教定期刊行物。宣教師Ｏ・Ｈ・ギューリックが援助刊行したもので、今村謙吉が社長兼印刷人、村上俊吉が編集発行人。本来の日本キリスト教世界の記事のほかに、生活改良のための衛生・育児など啓蒙的記事ものせた。1883年７月３日から『福音新報』と改題し、大阪で発刊。
〈https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz224630〉

12　寺澤美代子、138頁。

13　バージニア・Ａ・クラークソンは、マウントホリヨーク・セミナリーに学び、アメリカン・ボード宣教師として1877年11月に神戸英和女学校（後の神戸女学院）に着任し、第二代校長として学校整備に力をつくしたが、病気のため1882年に帰米した。1855年11月、再来日し、1887年迄同志社女学校に勤務し、第３代校長（1885-1887）を勤めた。（参照：宮井敏「第８章　宣教師ケイディ夫妻をめぐる評価」『来日アメリカ宣教師―アメリカン・ボード宣教師書簡の研究1869-1890―』同志社大学人文科学研究書編、1999年、280頁。）

14　小檜山ルイ「19世紀女子高等教育における宗教と科学―マウントホリヨークの事例―」『自然人間社会』（関東学院大学紀要）20号、1996年、61-89頁。

15　シャーロット・デフォレスト：アメリカン・ボード宣教師ジョン・デフォレストの二女として、大阪市川口居留地に生まれる。新島襄から幼児洗礼を受ける。父の移動に従って、大阪、仙台などで成長する。14歳でアメリカに行き、スミス・カレッジ（Smith College, 1871年創立）で学ぶ。1903年に、自身もアメリカン・ボード宣教師として日本に戻り、神戸女学院の教師になる。1905年に神戸女学院の第５代目の院長になり、引退する1940年まで神戸女学院の発展に尽くした。戦後、再来日して、神戸女学院史である *The History of Kobe College* を執筆した。

16　神戸女学院の1881年度のカリキュラムは、別紙（p.24）を参照のこと。

17　第３代から第５代までは、女性宣教師が校長をつとめ、同僚にアメリカの大学を卒業した宣教師や、有能な日本人教員がいた。それ以後は日本人教師が神戸女学

院長を勤めている。第３代校長ブラウン（在任：1883-1899、カールトン・カレッジ卒）には、同僚にソール宣教師と、同志社英学校卒業の原田助がいた。第４代院長ソール（在任：1899-1915、ウェルズレー・カレッジ卒）には、同僚にホルブルック（マウントホリヨーク大、ミシガン大卒、医博）がいた。第５代院長デフォレスト（在任：1915-1940、スミス・カレッジ卒）は、日本生まれて、14歳まで日本で育った。デフォレストを支えた日本人教師は同志社普通学校から米国オベリン大学卒業の畠中博（1885-1967）であった。

18　アリス・Ｊ・スタークウェザー：コネティカット州ハートフォードに生まれる。1866年にハートフォード女子セミナリーを卒業した。アメリカンボードの宣教師Ｊ・Ｄ・デイヴィスの要請で、1876年（明治９年）に来日する、京都御苑内の旧柳原邸のデイビス宅に住む。英学、万国史、地誌などを教えた。

19　参照：坂本清音『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876年－1893年）―アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして―　上巻』同志社女子大学史料室叢書Ⅱ、2010年、６頁。

20　佐々木豊寿（ささき　とよじゅ、1853-1901）：女性民権家として活躍した。少女時代には男装し、馬に乗って闊歩したと言われている。

21　スタークウェザーの葛藤については、次の文献に詳しい。坂本清音「９章　同志社女学校初代婦人宣教師 A. J. スタークウェザーの苦闘」『来日アメリカ宣教師―アメリカン・ボード宣教師書簡の研究　1869～1890―』同志社大学人文科学研究所編、1999年、303-326頁。

22　参照：前出（p.7）の「日課」. 原文は、C. Deforest, *The History of Kobe College: compiled on the occasion of the Seventy―Fifth Anniversary of Kobe College,* Kobe Collge, Japan, 1875, p.15.

23　アンナ・Ｙ・デイビス（Anna Young Davis, 1851-1944）、アメリカン・ボード宣教師、マウントホリヨーク・セミナリー1874年卒業、同志社設立の三人のうちの一人であるジェローム・デイビスの姪。

24　坂本清音、下巻、５頁。

25　大沢善助（1854-1934）は、同志社に米を納めていた関係から新島襄や山本覚馬と知り合い、京都府会議員にもなった、有名実業家の一人である。1877年に新島から洗礼を受け、キリスト者となった。

26　第５代院長のデフォレスト（院長在任1915-1940年）は、クラークソンを、“a woman of keen intelligence, high ideals and nervous temperament.”（非常に知的で、理想が高く、気難しい女性）と言っている。（C. DeForest, *The History of Kobe College*, 1875, p.11.）

27　坂本清音、同上、下巻、20頁。

28　溝口靖夫、同上、15頁。

参考文献

Cole, Arthur C. *A Hundred Years of Mount Holyoke College — The evolution of an educational ideal*, Yale University Press, 1940

DeForest, Charlotte B. *The History of Kobe College: compiled on the occasion of the Seventy — Fifth Anniversary of Kobe College*, Kobe College, Japan, 1875

同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師：アメリカン・ボード宣教師書簡の研究1869-1890』現代史料出版、1999年。

同志社女子大学125年編集委員会編『同志社女子大学125年』同志社女子大学、2000年。

神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史』総説、各論、神戸女学院、1976-1981年。

小檜山ルイ著「19世紀女子高等教育における宗教と科学―マウントホリヨークの事例―」『自然人間社会』（関東学院大学紀要）20号、1996年、61-89頁。

J. S. ミル著、竹内一誠訳『大学教育について』岩波文庫、2011年。

溝口靖夫著「近代日本におけるキリスト教の受容と神戸女学院―神戸女学院精神風土史論考―」『神戸女学院百年史　各論』1981年、8-17頁。

本井康博「京都博覧会とアメリカン・ボード―京都ステーション（同志社）への道」『キリスト教社会問題研究』45号、1966年、100-139頁。

大口邦雄著『リベラル・アーツとは何か　その歴史的系譜』さんこう社、2014年。

大島中正ほか編『山本覚馬建白「管見」―釈文・訓み下し文・現代語訳・英語訳―』同志社女子大学史料センター叢書Ⅳ、2020年。

坂本清音編著『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876年－1893年）―アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして―　上巻』同志社女子大学史料室叢書Ⅱ、2010年。

坂本清音編著『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876年－1893年）―アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして―　下巻』同志社女子大学史料室叢書Ⅲ、2012年。

茂　義樹著『明治初期神戸伝道と D. C. グリーン』新教出版社、1986年。

寺澤美代子著「神戸女学院の創設と初期の英語教育」『日本英語教育史研究会』5（0）、1990年、131-157頁。

上野直蔵編『同志社百年史　通史篇Ⅰ』、学校法人同志社、1979年。

ルドルフ、Ｆ著、阿部美哉・阿部温子訳『アメリカ大学史』玉川大学出版部　2003年。

別紙：同志社女学校1880（明治13）年度時間割

午前	科目	教員	午後	科目	教員
8－9	福音書研究	スタークウェザー	1－1：45	日本語作文	宮川
	モゴフィ第5読本			中国史	
	英文和訳（月曜日以外毎日）	宮川	1：45－2時半	万国史（日本語）（スウィントン）	宮川
9－10	モゴフィ第3読本	スタークウェザー	2時半－3時半	黙示録（月金）使徒書簡（火木）	宮川
	自然科学（日本語）	加藤	1：45－4時	裁縫1年次（火木）裁縫2年次（月金）	岸岡きし
	第1 or 第2読本	パーミリー	3時半－4時	奨励1年次（火）2年次（金）	新島
	日本地理	宮川		オルガンレッスン	スタークウェザー
10－11	算数Ⅱ（日本語）	加藤		体操	パーミリー
	日本史	土田常子	（水曜）	体育・講義・作文	パーミリー・宮川・スタークウェザー
11－12	人身窮理（火木金）	加藤			
	算数Ⅰ（月水、日本語）				
11－11半	英作文（火木）	スタークウェザー			
11半－12	第5読本（毎日）	スタークウェザー			
12－12：10	歌唱練習				

神戸女学院、1891（明治24）年度、予備科、本科、高等科のカリキュラム

學科表

西暦一八九一年（明治廿四年）に定めたるもの

科目		修身	和漢學	英語及英文學	數學	地理歷史	理化學	博物學
豫備科	第一年	聖書	普通國文作文 國史摘要	スペンサー第一第二讀本 會話習字	寺尾氏中等算術教科書			
	第二年	仝上	仝上 日本外史 仝上	仝上第四讀本、文法作文、習字	仝上			
本科	第一年	仝上	日本文法 捷徑 然草 十八史略 作文	文法 作文	オルチー氏算數學	奈氏日本地理 ハーパー萬國地理、マンチース地文學		
	第二年	仝上	日本文法 土佐日記 竹取ものがたり 朝名家文範 本作文詠歌	作文	オルチー氏代數學	新体日本歷史 スペンサー萬國史	理物學口授 化學口授	動物學口授 植物學
	第三年	仝上	住吉物語 枕草紙、文章軌範 仝上	ホーソーン氏等文集、テニソン、スコット等詩集、朗讀法	オルチー氏平面幾何學			マルチン生理學

		修身	和漢學	英文學	神學	哲學	心理學		數學		歷史	
		文科 理科	文科 理科	文科	文科 理科	文科	文科	理科	文科 理科		文科 理科	
高等科	第一年	聖書	榮花物語 史記八家文抄讀 作文詠歌	小説、傳記、修辭學					○高等代數學 ○立体幾何學		●萬國史	
	第二年	仝上	榮花物語 四書 作文詠歌	英文學			心理學		●○三角法 ●○高等代數學 ●解析幾何學			
	第三年	仝上	大鏡 考証文詠歌	原語學 古代文學	有神哲學	論理學 哲學史	教育學		●○微分積分 ●○解析幾何學		(文科)○美術史	